



名大トピックス

No.123 平成15年8月29日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

運営諮問会議（第3回会合）が開催される



CONTENTS

・第 期名古屋大学運営諮問会議(第3回会合)が開催される... 2	・附属図書館が特別企画「七夕飾り」を実施する..... 15
・平成15年度「21世紀 COE プログラム」 に6件が採択される..... 3	・附属図書館が国立大学図書館協議会賞受賞記念講演会及び 祝賀会を開催する..... 16
・「大学知的財産本部整備事業」に採択される..... 4	・教育学部の授業で学生が開発した作品が教材 WEB ページ コンテストで金賞を受賞する..... 17
・文部科学省主催「スーパーサイエンスハイスクール」(SSH) 事業に協力..... 5	
・第42回国立七大学総合体育大会開会式が開催される..... 6	
・法政国際教育協力研究センターが創立1周年記念講演会 を開催する..... 7	
・大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター の開設記念シンポジウムが開催される..... 8	
・大学院国際言語文化研究科がメディアプロフェッショナル論 講座開設記念シンポジウムを開催する..... 9	
・名大病院・関連病院卒後臨床研修ネットワーク総会 が開催される..... 10	
・工学部懇話会が開催される..... 11	
・農学国際教育協力研究センターが第1回オープンセミナー を開催する..... 12	
・太陽地球環境研究所が国際学会に研究発信ブースを出展... 13	
・博物館が特別講演会「アフガニスタンと名古屋大学」 を開催する..... 14	
	・宇宙をサブミリ波で見る 福井康雄..... 18
	・本学と名古屋市消防局が共同で放射線防護基礎講習 を開催する..... 20
	・留学生交流研究協議会(中部・近畿地区)が開催される... 21
	・愛知県地区国立学校等新任係長研修が開催される..... 22
	・グループウェア関係(パソコン利用者)講習会が 開催される..... 23
	[INFORMATION]
	・総長選考日程..... 24
	・テクノ・フェア名大'2003'の開催のお知らせ..... 25
	・平成15年度名古屋大学職員創作美術展作品募集について... 26
	・本学関係の新聞記事掲載一覧(15年7月分)..... 27



第 期名古屋大学運営諮問会議 (第3回会合)が開催される

第 期名古屋大学運営諮問会議(第3回会合)が、7月29日(火)、事務局第3会議室において開催されました。

会議では、本年1月に開催された運営諮問会議で「総長選考の暫定措置」についての意見を受け、その後、学内で審議を重ねて決定された「総長の選考に関する暫定基準」について、担当の奥野副総長から説明があり、質疑応答の後、同基準が了承されました。

続いて、「総長の選考に関する暫定基準」に基づき、以下の三点が了承されました。

総長候補者の選考についての一般的な意見をまとめ、総長選考管理委員会に提出すること。

総長候補者の推薦は、学内の候補者リストが出された後に、推薦するかどうか検討すること。

総長候補者を選考するために置かれる「選考会議」の委員として、大崎会長、岡崎副会長、曾我委員、清水委員が選出されたこと。

次いで、「大学をめぐる最近の動き」について松尾総長及び各担当副総長から説明があり、特に研究の推進、社会連携の推進及び国際交流の推進について詳しい説明が行われました。

委員からは、法人化に向けての取組状況や本学の中期目標・中期計画について意見を述べる機会がほしいとの要望があり、今後、本年10月中旬を目途に、組織改革検討委員会の審議経過をまとめるなどして、委員の方々に意見を出していただくことになりました。



運営諮問会議の様子



あいさつする松尾総長



平成15年度「21世紀 COE プログラム」 に6件が採択される

平成15年度「21世紀 COE プログラム」の審査結果が、7月17日（木）公表され、本学では6件が採択されました。これにより、平成14年度採択の7件と合わせて計13件の研究教育拠点の有することになりました。

「21世紀 COE プログラム」は、我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を学問分野ごとに形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行い、もって、国際競争力

のある個性輝く大学づくりを推進することを目的としています。今年度は、日本学術振興会が今年3月に、5分野（医学系、数学・物理学・地球科学、機械・土木・建築・その他工学、社会科学、学際・複合・新領域）に対し、国公私立大学から611件の申請を受け付け、21世紀 COE プログラム委員会（日本学術振興会を中心に、大学評価・学位授与機構、私立学校振興・共済事業団、大学基準協会の4機関により運営）における審査を経て、56大学133件が選定されました。

大学別の21世紀COEプログラム採択件数

（平成14年度、平成15年度合計）

件数	大 学
26	東京大学
22	京都大学
14	大阪大学
13	名古屋大学
12	東北大学、慶応義塾大学
10	北海道大学
9	東京工業大学、早稲田大学
8	九州大学
7	神戸大学
4	筑波大学、広島大学、立命館大学
3	一橋大学、千葉大学
2	東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京農工大学、お茶の水女子大学、横浜国立大学、長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学、奈良先端科学技術大学院大学、岡山大学、徳島大学、長崎大学、熊本大学、東京都立大学、大阪市立大学、日本大学、同志社大学、近畿大学
1	帯広畜産大学、秋田大学、山形大学、群馬大学、電気通信大学、政策研究大学院大学、新潟大学、富山医科薬科大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学、福井医科大学、山梨大学、信州大学、岐阜大学、浜松医科大学、名古屋工業大学、鳥取大学、愛媛大学、九州芸術工科大学、九州工業大学、佐賀大学、宮崎医科大学、横浜市立大学、静岡県立大学、大阪府立大学、姫路工業大学、兵庫県立看護大学、自治医科大学、青山学院大学、北里大学、国学院大学、国際基督教大学、順天堂大学、上智大学、聖路加看護大学、玉川大学、中央大学、東海大学、東京女子医科大学、東京電機大学、東京理科大学、東洋大学、法政大学、神奈川大学、東京工芸大学、愛知大学、藤田保健衛生大学、日本福祉大学、名城大学、関西医科大学、関西学院大学、久留米大学

21世紀COEプログラム採択拠点

平成15年度

分 野	拠点プログラム名称	拠点リーダー
医学系	神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成	大学院医学系研究科 教授 祖父江 元
数学・物理学・地球科学	宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解説	大学院理学研究科 教授 福井 康雄
数学・物理学・地球科学	等式が生む数学の新概念	大学院多元数理科学研究科 教授 宇澤 達
数学・物理学・地球科学	太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学	地球水循環研究センター 教授 安成 哲三
機械・土木・建築・その他工学	情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス	大学院工学研究科 教授 三矢 保永
学際・複合・新領域	同位体が拓く未来 —同位体科学の基盤から応用まで—	大学院工学研究科 教授 山本 一良

平成14年度

分 野	拠点プログラム名称	拠点リーダー
生命科学	システム生命科学：分子シグナル系の統合	大学院理学研究科 教授 町田 泰則
生命科学	新世紀の食を担う植物バイオサイエンス	大学院生命農学研究科 教授 水野 猛
化学・材料科学	物質科学の拠点形成：分子機能の解明と創造	物質科学国際研究センター 教授 関 一彦
化学・材料科学	自然に学ぶ材料プロセスの創成	大学院工学研究科 教授 浅井 滋生
情報・電気・電子	先端プラズマ科学が拓くナノ情報デバイス	大学院工学研究科 教授 菅井 秀郎
情報・電気・電子	社会情報基盤のための音声映像の知的統合	大学院情報科学研究科 教授 末永 康仁
人文科学	統合テキスト科学の構築	大学院文学研究科 教授 佐藤 彰一



「大学知的財産本部整備事業」に採択される

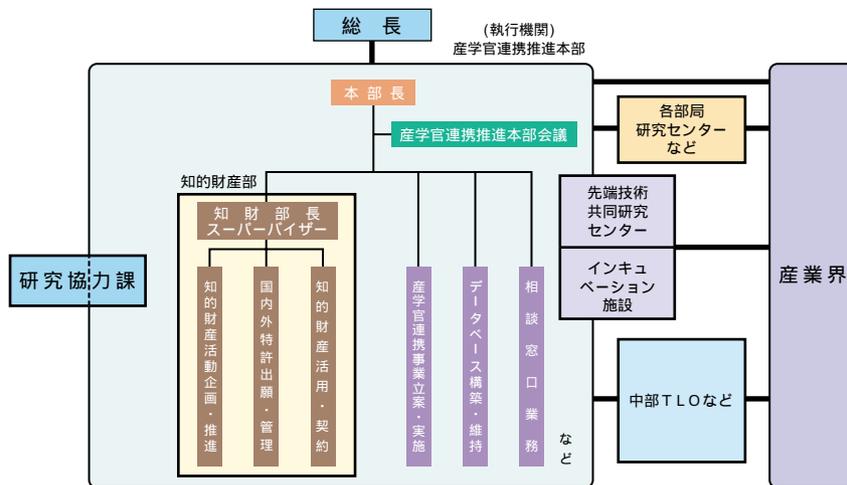
文部科学省が平成15年度より創設した「大学知的財産本部整備事業」に、全国83件（122機関）から申請があり、大学知的財産本部審査小委員会における書面審査及びヒアリング審査を経て、7月15日（火）本学を含む34件（56機関）が採択されました。

同事業は、国公立大学、国公立高等専門学校及び大学共同利用機関における知的財産の創出・取得・管理・活用を戦略的に実施するため、全学的な知的財産の管理・活用を図る「大学知的財産本部」を整備し、知的財産の活用による社会貢献を目指す大学づくりを推進するために創設されたもので、また、大学における知的財産の管理・活用等知的財産活動の組織体制整備の「モデル事業」であり、今年度から（2年経過後の中間評価を経て）、5年間（予定）実施されるものです。

本学は、「産学官連携推進本部」の内部に「知的財産部」を設置し、知的財産部長、知的財産管理スーパー

バイザーのもと、知的財産活動企画・推進グループ、国内外特許出願・管理グループ、知的財産活用・契約グループを置き、知的財産の権利化、管理、有効活用はもとより、産学官の長期的なパートナーシップの確立、持続的な研究の発展、シーズ・知的財産の創出及び社会におけるイノベーションの実現を図ることを目指した構想を提出し、採択されました。

当面、産学官連携推進本部及び知的財産部において、国立大学法人に伴う知的財産の原則機関帰属化に向けて、職務発明規程等の知的財産関係規程や利益相反に関するポリシー、ガイドライン等の検討・作成等を進めるとともに、学内研究者のシーズの発掘、企業ニーズの把握に努め、共同研究・受託研究等を積極的に実施していきます。また、技術移転機関（TLO）との連携をより一層強化するなど本学の知的財産活動の基盤整備を中心に進めていきます。



知的財産部の組織



文部科学省主催 「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業に協力

本学は、社会連携推進の一環として昨年に引き続き文部科学省が主催する「スーパーサイエンスハイスクール」（SSH）事業に協力することになりました。

これは、昨今の青少年をはじめとする国民の「科学技術離れ」、「理科離れ」が指摘される状況に対処し、「科学好き」、「理科好き」な児童生徒を増やすため平成14年より行われている事業で、科学技術・理科・数学教育を重点的に行う学校を「スーパーサイエンスハイスクール」と指定し、理科や数学に重点を置いたカリキュラム開発や大学や研究機関等と効果的な連携方策について研究を実施するもので、一宮、四日市高等学校等今年度新規指定校26校と岡崎高等学校等昨年度からの継続校を合わせて全国で52校が指定され、これ

ら3校から本学へ協力の依頼があったものです。

本学では、社会連携推進室が窓口となり、理学、医学系、工学、生命農学、環境学及び情報学の各研究科の協力を得て、夏季休業期間を利用しての本学研究室での実験実習や集中講義のほか、市内ホテルに泊まり込んでの論文指導等も行われます。

また、文部科学省では、同種の事業として、「サイエンスパートナーシッププログラム」（SPP）事業や「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」（SELHi）事業を主催していますが、愛知県内のこれら事業の指定校である大府東、菊里（SPP）、千種（SELHi）の3高校からの協力依頼も受けることになっています。



金丸岡崎高等学校長（右端）から事業内容の説明を受ける
松尾総長（左端）と坂神総長補佐（左から2番目）



第42回国立七大学総合体育大会開会式が 開催される

本学が主管校となる第42回国立七大学総合体育大会の開会式が、7月19日（土）豊田講堂において、開催されました。同体育大会は、北海道大学、東北大学、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学及び本学の七大学が毎年輪番制で当番校となって開催されている定期競技大会で、昭和37年に第1回大会が北海道大学主管で開催されて以来、約半世紀近くもの間行われている伝統ある大会です。

当日は、あいにくの梅雨模様でしたが、七大学の総長、副総長及び体育会委員長をはじめ多数の大学関係者出席のもと、盛大に開催されました。式の中で、松尾総長から主管校としてのあいさつがあり、また、本学

学生の勅使河原孝行大会実行委員長、中村勇介体育会委員長から七大戦開幕にあたり熱い辞が述べられ、次期当番校の中村北海道大学総長から来賓のあいさつがあり、8月12日（火）までの熱い戦いの火蓋が切って落とされました。

開会式に引き続き、レセプションがシンポジオンホールにおいて開催されました。松尾総長のあいさつに始まり、伊藤副総長の乾杯の音頭には、副総長とともに、各研究科長が全員「七大戦Tシャツ」を着用して乾杯を行い、本学の団結力の強さをアピールしました。その後、参加者相互で歓談が行われ、盛会のうちに終了となりました。



開会式



レセプションで乾杯する伊藤副総長（中央）



法政国際教育協力研究センターが 創立1周年記念講演会を開催する

法政国際教育協力研究センターは、7月2日（水）創立1周年記念講演会を開催しました。同センターは、平成14年4月に創立され、アジア諸国の法制度・政治制度の研究、アジアの開発途上国を中心とする国々に対する法整備支援及びその理論研究を行なっています。

講演会では、杉浦センター長及び松尾総長によるあいさつに引き続き、竹下守夫駿河台大学学長が「法整備支援の現状と課題 - カンボジア民訴法起草支援の経験をふまえて」という題で講演を行いました。竹下氏は、まず法整備支援を「開発途上国が行なう法令及びこれを運用する体制の整備を支援する活動」と確認した上で、その究極的理念を「法の支配」の妥当する民主国家体制 = 民主的法治国家体制の確立に貢献することに求めました。続いて、1998年11月に始まる国際協力事業団（JICA）による「カンボジア重要政策支援『法整備支援』プロジェクト」の一環として、自身が関与した同国民事訴訟法案の起草経験を述べました。プロジェクト内に設置され、竹下氏が座長を務めた民

事訴訟法作業部会においては、民主的法治国家の訴訟原則の採用、カンボジア側起草委員との共同作業、

将来の法運用にあたる人材の育成もあわせて図るといった基本方針に基づき活動が展開されたとのことでした。日本側有識者から成る作業部会による原案の起草、カンボジア側関係者を対象に現地で開催されたワークショップによる議論、完成した草案（日本語）からカンボジアの公用語であるクメール語版を最終的に作成する用語確定会議といった慎重な作業を繰り返した結果、2003年3月までに最終草案は予定通りカンボジア側に引き渡されました。

講演会には、法整備支援事業の関係者を中心に大学内外から60名を超える参加者があり、終了後の懇親会では、河野法学研究科長の乾杯の発声に引き続き、松尾総長、竹下氏を囲んで和やかな懇談の場が持たれました。



あいさつする松尾総長



講演する竹下駿河台大学学長



あいさつする杉浦センター長



大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センターの 開設記念シンポジウムが開催される

神経疾患・腫瘍分子医学研究センター開設記念シンポジウムが、6月24日(火)、医学部研究棟1号館において開催されました。

同センターは、本年度4月に、大学院医学系研究科附属病態制御研究施設(病態研)が改組され、新たに設置されたもので、平成10年度から5年間遂行されてきた中核的研究拠点(COE)形成プログラム「神経変性疾患と悪性腫瘍の分子医学」に参加した研究グループと病態研を発展的に統合、改組し、神経疾患と悪性腫瘍の分子病態の解明と新たな治療法開発のための研究を遂行することを目的としています。また同センターは、3研究部門(腫瘍病態統御学、発生・再生医学、先端応用医学)と1客員部門から構成されており、医学系研究科の新たな研究拠点として期待されています。

シンポジウムでは、杉浦医学系研究科長、大島医学部附属病院長及び吉田松年名誉教授のあいさつの後、高橋センター長から、同センターの設立趣旨の説明が行われました。続いて、京都大学、東北大学及び愛知県がんセンターからの4名の招待演者と各研究分野の研究者8名が研究発表を行いました。



開設記念シンポジウムの様子

医学部教官、大学院生を中心に100名以上の参加があり、各研究発表に対し活発に討論が行われました。同センターが神経疾患と悪性腫瘍の統合的研究をリードする拠点として、また世界への情報発信地として大きく貢献していくことが期待されており、シンポジウムの成功はその第一歩となりました。

なお、シンポジウムのプログラムは、次のとおりです。

高橋 隆(愛知県がんセンター)

Oncogenomics : ヒト肺癌の統合的分子病態解析とそのトランスレーション

浜口 道成(名古屋大学)

Src キナーゼによる足場非依存性増殖の制御機構

松口 徹也(名古屋大学)

腫瘍・感染抵抗性を制御する自然免疫機構

古川 鋼一(名古屋大学)

細胞増殖における酸性糖脂質の役割

野田 哲生(東北大学)

マウス発生工学を用いたヒト発がん研究

村松 喬(名古屋大学)

ミッドカインに着目した新しい治療法の開発

鈴木 元(名古屋大学)

DNA複製とゲノムスタビリティ

菊池 韶彦(名古屋大学)

II型DNAトポアイソメラーゼによる診断と治療との出会い

小椋 利彦(東北大学)

Irx2遺伝子による小脳形成誘導

貝淵 弘三(名古屋大学)

神経細胞の極性形成機構

影山龍一郎(京都大学)

2時間を刻む生物時計 Hes1による神経分化制御

高橋 雅英(名古屋大学)

GDNF/RETシグナル伝達系の器官形成における役割



大学院国際言語文化研究科がメディアプロフェッショナル論講座 開設記念シンポジウムを開催する

大学院国際言語文化研究科は、今年度から新たに連携講座として、メディアプロフェッショナル論講座を開設しましたが、これを記念したシンポジウムが7月11日（金）、文系総合館カンファレンスホールにおいて、教官及び学生約120名の参加のもと行われました。

同講座は、メディア社会の将来を担う人材育成を目指して設置されたもので、中日新聞社から客員教授2名、客員助教授1名を迎えるほか、トヨタ自動車、NHK及び東海テレビ等から講師を迎え、新聞論、デジタル・メディア論、メディア・テクノロジー論、放送メディア史論及びメディア・コンテンツ制作演習等の授業が開講されます。

シンポジウムは、同研究科の大学院学生がメディア技術手法を用いて作成したビデオによる講座紹介に始まり、松尾総長、平井研究科長及び連携機関の中日新聞社大島宏彦最高顧問のあいさつの後、ジェラルド・カーティス コロンビア大学教授による「変化する国際情勢とメディアへの期待」と題する基調講演が行われました。引き続き、メディア関連企業の講師等による「これからのメディアを担う人」と題するパネルディスカッションが行われ、同講座への期待やこれからのメディアの課題について白熱した議論が交わされました。



講演するジェラルド・カーティス教授



パネルディスカッション



名大病院・関連病院卒後臨床研修 ネットワーク総会が開催される

平成15年度名大病院・関連病院卒後臨床研修ネットワーク総会（以下、名大卒研ネットワーク総会）が、7月5日（土）名古屋市公会堂で開催されました。

名大卒研ネットワーク総会は、本学病院関係者、関連病院の院長及び研修担当者、並びに研修を希望する学生等が一堂に会し、臨床研修内容の向上、研修病院情報の提供及び研修病院決定のためのサポート等の諸点について、基本方針の決定と活動スケジュールを明らかにするために行われています。また、総会に引き続いて行われる「Meet The Director」は、研修希望者が研修に関する情報や夏休み中の見学や実習案内などを研修病院から直接収集する貴重なイベントとして、研修希望者及び関連病院の双方から好評を得ています。本年度の参加者は、平成16年度からの卒後臨床研修必修化を間近に控えて、研修希望者（医学部6回生）が本学と他大学合わせてネットワーク登録者354名中307名と昨年に比べて大幅に増加し、これに関連病院関係者127名、本学関係者（名大5回生のスタッフを含む）を含めて約500名と大盛況でした。

第一部の総会では、大島ネットワーク代表（附属病院長）、杉浦医学系研究科長及び藪崎紀充学生卒研代表のあいさつの後、文部科学省高等教育局の小松医学教育課長から、学部教育の改革、卒後研修実施の考え方、学生へのメッセージ等が述べられ、また、厚生労働省医政局の吹野課長補佐からは、新臨床研修制度についての説明がありました。引き続き、松尾卒後臨床研修センター長から、平成16年度研修に向けたネットワークの行事予定と研修病院決定方法（マッチングスケジュール等）及びネットワーク規約と基本方針について確認があり、その後、役員選出及び質疑応答が行われました。

第二部の Meet The Director は、グループ形式で前半・後半の2回各病院ごとにプレゼンテーションを行い、その後ブース形式で、学生が希望の病院を選んで直接担当者に質問を行いました。希望者が多すぎ、整理券を発行し人数制限を設けた病院もありましたが、真剣に研修病院の情報収集に取り組む学生の姿が多く見られ、直接病院の関係者と話ができたと好評でした。



ブースで病院担当者に質問をしている学生



第一部総会の様子



工学部懇話会が開催される

工学部懇話会が、7月3日（木）工学部4号館講会議室において、愛知、岐阜、三重の東海3県下を中心に59の高等学校から69名の高校教諭が参加し、同学部の教育体制委員会及び学生生活委員会各委員が出席する中、「名古屋大学工学部の期待する学生像について」をテーマに開催されました。

会に先立ち、平野工学研究科長のあいさつと会の趣旨説明が行われ、続いて、大学側から、昨年度に大学評価・学位授与機構によって実施された教育評価の結果と21世紀 COE プログラムに基づく先進的研究の紹介を通じて、早川義一工学部教育体制委員会委員長（工学研究科教授）と浅井滋生工学研究科教授から「工学部の教育研究の特色と期待する学生像について」の提

言があり、高等学校側に対し理解を求めました。

引き続き、各班に分かれ、各研究室の見学をした後、「新たな高等学校と大学の連携」というテーマで自由討論を行い、活発な意見交換が行われました。

従来、同懇話会は、工学部の自己評価の一環という側面から、毎年、同時期にテーマを決めて開催してきましたが、今回は、急速に変化を遂げつつある高等教育の現状を説明し、加えて教育現場である研究室見学を行うことにより、実際に学ぶ学生の姿に接し、その中から、高等学校の教諭と本学部の教官とが情報交換を行い、互いに理解を深め、新たな連携を模索するよい機会となりました。



あいさつ及び会の趣旨説明をする平野研究科長



研究室見学で大学院学生の研究発表を聞く参加者達



農学国際教育協力研究センターが 第1回オープンセミナーを開催する

農学国際教育協力研究センターは、6月25日（水）、今年度第1回オープンセミナーを開催しました。国際協力事業団（JICA）国際協力総合研修所国際協力専門員の金森秀行氏が「農業教育研究協力プロジェクトの形成・実施・評価手法に関する研究」と題して、日本の大学がこれまでに行ってきた20の農業分野のJICA技術協力プロジェクトの中から適切な修了プロジェクト7件に焦点を当て、その特徴、投入、成果、妥当性、有効性、効率性、インパクト及び自立発展性、問題点

並びに教訓などを整理・分析し、今後のプロジェクト形成・実施・評価手法の改善への留意点について、平成13年度同センター客員教授として研究した内容を発表されました。当日は、筑波大学やJICAなど遠方からの来訪者を含め学内外から17名が参加しました。発表内容には、今後の農学系大学が海外協力を行っていくうえで、きわめて有意義な教訓、達成度の指標などが含まれており、参加者からは、高度な内容をわかりやすく話されたと大変好評でした。



オープンセミナーで研究成果を発表する金森氏



太陽地球環境研究所が国際学会に 研究発信ブースを出展

第23回国際測地学・地球物理学連合総会(IUGG2003)が、6月30日(月)から7月11日(金)まで、札幌市で開催され、太陽地球環境研究所からも、オーロラなど太陽地球間現象をテーマにした研究発信ブースを出展し、最新の研究成果を内外にアピールしました。

同総会は、太陽活動、地球磁気圏・電離圏、大気過程、海洋、地震、火山など、太陽から地球中心までのすべての物理化学現象を対象にしており、1922年のローマ大会以来4年ごとに開かれている国際会議です。日本学術会議と関連16学会が共同主催するという、日本で行われた国際会議としては稀に見る大がかりな体制が敷かれ、7月3日(木)午後には、天皇皇后両陛下が行幸され、発信ブースの見学をなされるなど大成功のうちに終了しました。

今回は、アジアで初めての開催となり、直前までSARS問題で参加者が減少するのではと心配されましたが、結局世界96ヶ国から約5000人の科学者が集まり、IUGGとして新記録となりました。研究発信ブースには、米航空宇宙局(NASA)や米海洋大気庁(NOAA)など海外の研究機関をはじめ、国内からは本学、宇宙開発事業団、北海道大学、東京大学、宇宙科学研究所、海洋科学技術センターなど多数の研究機関からの出展がありましたが、太陽地球環境研究所の研究発信ブースでは、同研究所制作のビデオが常時映されるとともに、来訪者には、データCD-ROM、パンフレット及びデータカタログなどを配布し、各国の研究者との交流を深めるなど好評を博しました。



本学の研究発信ブースにて



本学の研究発信ブースにて (左から4人目が上出所長)



博物館が特別講演会 「アフガニスタンと名古屋大学」を開催する

博物館は、6月30日（月）「失われた文化財 アフガニスタン パーミヤン展」関連の特別講演会を開催しました。講演会に先立って、名古屋在住の涂 善祥氏による中国琵琶のコンサートが行われ、中国琵琶の奏でるシルクロード音楽と日本の音楽（荒城の月）に満員の聴衆が魅了されました。

講演会では、清水哲太トヨタ自動車(株)副社長とナジブラ・モハバット セントラルスプリング社社長の2名が、100名を越える聴衆を前にして「アフガニスタンと名古屋大学」という演題で講演を行いました。はじめに、清水氏が本学山岳部OBとして山岳調査の観点から東京オリンピックのあった1964年に実施された第1回名古屋大学アフガニスタン学術調査について、無二の親友であるナジブラ氏との出会いの経緯、山岳

調査の苦労話、当時の国際情勢、アフガニスタン調査後のパキスタン・カラコルム遠征等の臨場感のある話をされました。続いて、アフガニスタン生まれのナジブラ氏が、アフガニスタンの歴史と現状、自身と日本及び本学との関係について淡々と分かりやすく話され、その中で述べられた「自分はもう一度生まれ変わっても、必ず日本に来て名古屋大学に留学したいと思う」という言葉には、聴衆一同がジーンとなり、深い感銘を受けました。

今回の講演会により、本学の行った1964年のパーミヤン仏教遺跡調査及び1968年のイシュカシム地域における栄養適応調査が、ナジブラ氏のような日本とアフガニスタンの掛け橋となる人の存在によって実現したということも多くの方が理解しました。



講演する清水氏



講演するナジブラ氏



附属図書館が特別企画「七夕飾り」を実施する

附属図書館は、7月2日（水）から7日（月）の6日間、特別企画「七夕飾り」を実施しました。玄関ホールに竹笹を調達し、スタッフで折り紙等を飾り付けました。また、異文化交流の場になるよう七夕の話について、日本語だけでなく英語や中国語で書かれたものも用意し、留学生にも七夕の由来を理解してもらえよう工夫しました。利用者たちは、用意された短冊や折り紙を使って夢や願い事を書き始め、いたず

らっぱい顔をしながら竹にくくりつけていました。短冊には、ハングル、中国語や英語で書かれたものもあり、他の人が書いた短冊を読んで、微笑んでいるグループがいたりと普段と違う利用者の表情がみられました。

6日間で約1,200枚の色とりどりの短冊が利用者によって飾り付けられ、自分の夢や願いだけでなく、他の人の思いにも触れ、意外な交流の場となりました。



「七夕飾り」の様子（玄関ホール）



附属図書館が国立大学図書館協議会賞受賞記念講演会及び祝賀会を開催する

附属図書館は、平成15年度国立大学図書館協議会賞の受賞を記念して、7月11日（金）記念講演会及び祝賀会を開催しました。

同賞は、国立大学図書館協議会が年一回の総会において、国立大学図書館職員の図書館に係わる研究成果若しくは図書館活動において多大な功績が認められる者（又は、グループ）に対して、贈られるもので、毎年1、2名あるいは受賞該当者なしということもあります。

本学図書館では3度目となる今回の受賞は、「和漢古典籍に関する知識と技術の継承プロジェクト」（「名古屋大学附属図書館和漢古典籍に関する知識と技術の継承プロジェクトグループ」）によるもので、学内の図書館職員が3年間にわたり、自主的研修と技術習得を継続してきたものを組織的に継承するものとして作上げたことが対象となりました。

講演会では、伊藤副総長の祝辞の後、受賞グループ（和古書及び漢籍の2グループ13名）の紹介、受賞報告を兼ねたミニ講演及びグループを一貫して指導して

きた塩村 耕文学研究科助教授（日本文学・日本語学講座、附属図書館研究開発室員）による「新たな時代の古典籍書誌目録を目指して」と題した記念講演が行われました。その中で、日本の古典籍は、質・量ともに世界に誇るべきものであり、附属図書館は、地域の古典籍資源を更に収集し、社会の利用に供する「文書館」的な機能を強化して欲しいとの要望が述べられました。

引き続き行われた祝賀会には、伊藤、佐々木及び中島副総長ほか、学内外から約50名の参加を得て、受賞グループを祝うとともに、会場の各所でいくつかの輪が出来上がり、和古書及び漢籍などの現状から、本学での資料の目録作成及び電子化の展開状況、果ては井原西鶴や雨森芳洲といった人物談義に至るまで様々な話題に包まれて、和やかな雰囲気のうちに行なわれました。

なお、関連電子展示「古書は語る」のホームページアドレスは、<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/tenji/2002/kagami.html>です。



受賞メンバーの紹介



講演する塩村助教授



教育学部の授業で学生が開発した作品が 教材 WEB ページコンテストで金賞を受賞する

昨年度の教育学部の授業「教育情報学演習I」(大谷尚教育発達科学研究科教授)では、教材 WEB ページ(学習のためのホームページ)の研究と開発をテーマに授業を行いました。授業で開発した4つの作品のうちの一つが、「インターネットを活用した Web 教材開発コンテスト ThinkQuest@Japan2002」の「大学生・社会人の部」でファイナリストに残り、6月14日(土)東京の都市センターホテルで行われた「ファイナリス

ト発表会・授賞式」において、金賞を受賞しました。作品は、「インタラクティブ KANBUN 入門」で、中学生や高校生にとくくなじみのない漢文を、クイズやアニメーションを使って対話的に楽しく学習するもので、同学部3年の橋川 彩、米津直希、研究生の井口裕史の3氏で開発しました。

なお、この作品は、<http://i-kanbun.jp/> で実際に体験することができます。



受賞した作品「インタラクティブ KANBUN 入門」の一部



「ファイナルプレゼンテーション・授賞式」の橋川、米津、井口(左から)の3人



宇宙をサブミリ波で見る

福井 康雄

太陽の光は虹の7色に分けられる。もっとも強いのは緑色の光、波長0.5ミクロンの電磁波である。人間は、その光の中で生活しやすいように、青色 - 緑色 - 黄色 - 赤色を感じるように眼を発達させた。洞窟に住む虫達は、光で見る必要がないから、眼ではなく触覚を発達させたのである。

人間はまず光で星々を知った。光以外の電磁波で宇宙を見ることは、つい70年ほど前、偶然にはじまった。そして、ここ30年の間に一気に本格的になり、天文学は今、多波長観測の時代である。電波、赤外線、紫外線、エックス線などで宇宙を観測することが日常化している。波長が変わると、光では見えなかった新しい天体が見えてくる。星が生まれる元のガス塊や、終末を迎えた星の爆発などである。

「すべての波長が開拓されつくしたか」というと、そうではない。サブミリ波という波長300 - 1000ミクロンの電磁波が、まだ宇宙観測に使われていない。サブミリ波は地上にはほとんど届かない。空気中の水蒸気が吸収してしまうためである。高い山に登るか、衛星を

使うことになる。南米チリのアタカマ砂漠付近に広大な乾燥地域があり、サブミリ波観測にうってつけであることが分かったのは、つい10年たらず前のことである。アタカマ高地は標高5000m、晴天率70%以上という天文観測の理想郷である(図1)。1996年に名古屋大学からチリのラスカンパナス(標高2400m)に移設した電波望遠鏡「なんてん」(図2)をグレードアップして、アタカマに移設する計画「NANTEN2」が目下、着々と進んでいる。

サブミリ波では何が見えるのか。「なんてん」が得た天の川の電波地図(図3)を見ると、分子ガスが天の川の円盤に薄く集中することが分かる。温度が摂氏マイナス260度、角砂糖1個分の中に水素分子が1000個位ふくまれる宇宙の高密度ガスである。その中には、一酸化炭素分子などの色々な分子がわずかながら混じっている。水素分子は電波を出さないが、一酸化炭



図1 南米チリ北部のアタカマ高地。標高約5000メートルの乾燥地帯である。



図2 ラスカンパナスに設置された「なんてん」電波望遠鏡。主鏡の口径は4メートルである。

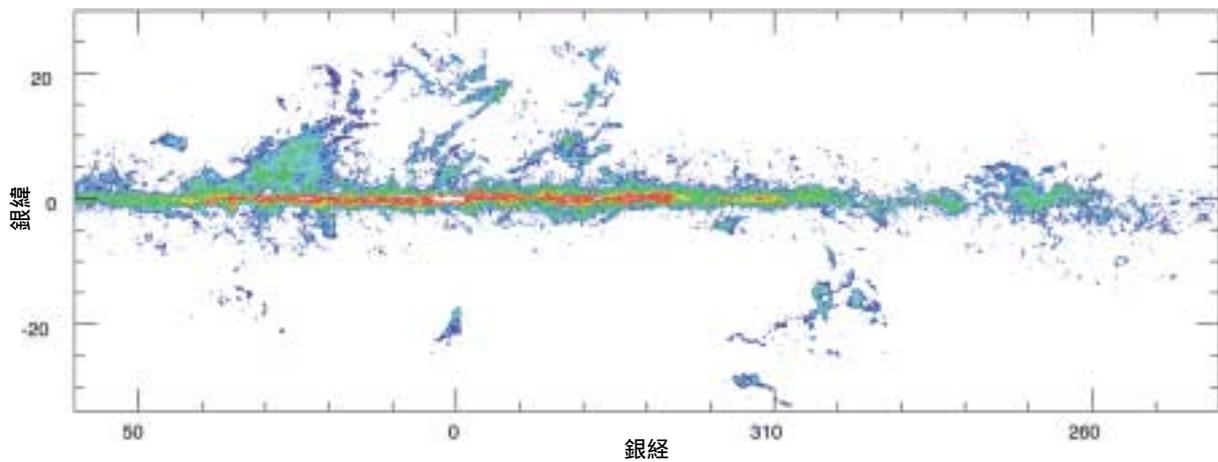


図3 「なんてん」望遠鏡の得た「天の川」の電波地図。総計110万観測点の観測データを1枚にまとめたものであり、カラーは、星間一酸化炭素分子COの放つ波長2.6ミリメートルの電波強度の大小を示す。分子ガスは「天の川」の中心面に薄く集中することが分かる。

素分子COは色々な波長の電波を放つ。「なんてん」が観測してきたのは、COの波長約2600ミクロン(2.6mm)の電波である。COの出す波長約300ミクロンのサブミリ波で同じように地図を作ったとすると、温度が高い部分、つまり星を活発につくっているガスが際だって見えるはずである。サブミリ波は、高温高密度のガスから強く放射されるためである。いままで見えなかった新しい宇宙の顔が見えてくる。また、サブミリ波には炭素原子C特有の電波も放射される。炭素原子は、原子と分子の境目をあらかずので、分子ガス雲誕生の様子も見えてくると期待される。星と銀河の誕生の仕組みの解明が一挙に前進するに違いない。

NANTEN2ではまず、鏡面を精密にする。現在の「なんてん」よりも3倍以上高い15ミクロンの精度が目標である。サブミリ波の短い波長がこの高精度を必要とする。もう一つの特徴は、受信機である。波長600ミクロンと300ミクロンの複眼受信機を搭載してスピーディーに空を掃く計画である。2003年暮れにはアタカマ高地への移設が行われる(図4)。同じアタカマ高地には、2011年完成を目指して巨大電波望遠鏡アルマも作られる。こちらは、日米欧共同の大事業になる予定である。NANTEN2は世界初のサブミリ波広域地図をつくって、アルマをガイドするパイロットにもなる。



図4 NANTEN2の移設地アタカマ付近の地図

プロフィール

ふくい やすお

昭和26年大阪市生まれ。東京大学大学院理学研究科博士課程修了。専攻は電波天文学。名古屋大学理学部助手、同助教授を経て、平成5年10月から同教授。平成8年4月から同大学院理学研究科教授。現在、総長補佐(研究担当)、高等研究院流動教官を兼任。平成15年から21世紀COEプログラム「宇宙と物質の起源:宇宙史の物理学的解釈」拠点リーダー。インド天文学会パイヌバップ賞、中日文化賞等を受賞。





本学と名古屋市消防局が共同で放射線防護基礎講習を開催する

名古屋市消防局と本学が共同で7月1日（火）、2日（水）、名古屋市消防局の消防・救助隊員（56名）を対象に、放射線防護基礎講習を、グリーンサロン東山ミーティングルームを主会場として開催しました。

名古屋市消防局では、放射線取扱施設で万が一事故が発生した場合においても、所属の消防・救急隊員が、放射線に被曝することなく、十分な消火・救助活動が行えるよう、放射線防護に関連する基礎的知識を、隊員の一般教養の一つとして身につけることを目的に、講習会の開催を企画しました。この講習会を実施するにあたり、その講師たる人材を何処に依頼するかについて検討した結果、中部地区の基幹大学であり、中部地区最大規模の放射線施設を有する名古屋大学がその候補として選択され依頼があったものです。

本学では、饗場安全保障委員会委員長及び大学院工学研究科を中心に、この申し出について検討した結果、

地元防災関係機関との連携は非常に大切な事項であるとの認識に至り、これを快諾し、研究協力課を窓口講習会の開催が決定しました。

講習会は、奥野副総長の開会のあいさつに始まり、飯田孝夫工学研究科教授及び宮原 洋医学系研究科教授による「放射線防護の基礎」に関する講義、本学技術職員を講師とした放射線測定機器の取扱実習が行われました。その後、本学の代表的な3つの放射線施設（アイソトープ総合センター、コバルト60ガンマ線照射施設及び大学院工学研究科強放射能第1実験室）の見学を行いました。最後に、名古屋市消防局関係者及び河出原子力委員会委員長があいさつし、閉会しました。

参加した消防・救助隊員からは、実践的な質問が熱心に行われ、大変有意義な講習会となりました。



サーベイメーター取扱実習の様子



熱心に受講する消防・救助隊員



開会のあいさつをする奥野副総長



留学生交流研究協議会 (中部・近畿地区)が開催される

平成15年度留学生交流研究協議会(中部・近畿地区)が、6月19日(木)、20日(金)の両日、文部科学省、独立行政法人教員研修センター及び本学の共催により、国公立大学・短大、高専、専修学校及び関係省庁・機関から430名余りの参加のもと、メルパルクNAGOYAで開催されました。

第1日目は、午前10時から開会式が行われ、当番校を代表して奥野副総長からあいさつがあり、次いで、主催者を代表して黒木文部科学省高等教育局留学生課長からあいさつがありました。続いて、全体会議で関係省庁等による所管事項の説明が行われました。

午後からは、シンポジウムが行われ、4つのテーマ

「日本留学試験と留学生教育」、「留学生像の変容と特色ある日本語教育の取り組み」、「宿舎：地球市民を育てる場」、「大学の国際化と留学交流プログラムについて」のうち、参加者が希望するテーマに出席し、パネリストからの事例報告により提出された現状や問題点を中心に議論が展開されました。

また、第2日目には、全体会議として、前日行われた4つのシンポジウムについての報告及び質疑応答が行われ、留学生に対する安定感のあるサービスを提供していけるような仕組みの構築に向けて率直な意見交換が行われた今回の研究協議会を締めくくりました。



全体会議でのシンポジウム報告



あいさつする奥野副総長



シンポジウムの様子



愛知県地区国立学校等新任係長研修 が開催される

平成15年度愛知県地区国立学校等新任係長研修が、6月24日（火）から27日（金）までの4日間、本学及び国立乗鞍青年の家で開催されました。

同研修は、愛知県地区の国立学校等で新たに係長（専門職員、看護婦長を含む）に任用された者に対し、その職務の遂行に必要な知識、行政的視野及び基本的な管理能力の育成を図り、もって大学行政の円滑な遂行に資することを目的として実施されたものです。

今年度は、6機関から45名（男性20名、女性25名）が参加し、関総務部長の開講のあいさつに続き、同部長による「大学行政の諸課題」、中島副総長による「名古屋大学における教育改革」、吉田俊和教育発達科学研究科教授による「職場の人間関係について」等の講義が行われました。

また、愛知江南短期大学事務部長の吉田重正氏によ

る「私立大学の現状と課題について」、株式会社医学生物学研究所会長の数納（すのう）幸子氏による「変革の時代とマインド」等学外講師による講義が行われました。

さらに、国立乗鞍青年の家では、昨年度に引き続き意識の啓発を図るための参加型研修として、8時間の演習が行われ、「係長の役割・部下の育成等」、「男女共同参画」及び「倫理」と与えられた演習課題に班別に熱心に取り組み、司会・記録それぞれに与えられた役割に積極的に取り組む姿が見られました。また、朝のつどい・清掃・指導員によるレクリエーション等で機関・職種を越えて親交を深め、研修の成果を今後の職務遂行に生かせる大変有意義な期間を過ごすことができました。



開講のあいさつをする関総務部長



関総務部長、金子人事課長と受講生全員による記念撮影



グループウェア関係（パソコン利用者） 講習会が開催される

平成15年度グループウェア関係（パソコン利用者）講習会が、7月2日（水）、3日（木）及び7日（月）の3日間、事務局第3会議室において、開催されました。

同講習会は、事務系職員の事務処理ソフトが、平成7年以降、文部科学省における標準ソフトウェアに準拠し、事務用ワープロソフトは「一太郎」、表計算ソフトは「ロータス」に統一して運用されているところ、近年、標準ソフトであるワープロソフト「Word」、表計算ソフト「Excel」による電子メール等の文書交換が多くなってきたことを受け、「Word」及び「Excel」について、初級・中級レベルを対象として新規に実施されたものです。

講習会では、3日間で約90名の職員が参加し、インストラクター3名からの説明及び指導により、午前中

は、「Word2002のサンプル文書等の編集機能」（範囲選択、段落編集、書式設定等）及び「Word2002、Excel2002共通の図形処理による表現力アップ」（クリップアート、ワードアート、オートシェイプ等）について、午後からは、「Excel2002の表作成等の基礎機能及びワンランクアップの便利機能」（セルの使いこなし、ブックとシートの管理、入力規則の設定、利用頻度の高い基本関数、ユーザー定義の表示形式、条件付書式の設定、セル参照を利用した表計算等）についての操作方法を実習を通じて習得しました。

なお、受講後のアンケートによれば、大多数の受講者が受講目的を達したようで、今後も開催を希望するとともに、さらなる知識、技術の向上を目的とする内容の講習会開催を希望する意見が多数寄せられました。



講習会の様子

INFORMATION

総長選考日程

総長選考日程等が平成15年7月18日の評議会において承認されました。
これに伴い、下記のとおり総長選考が行われます。

月 日	会 議 等	事 項 等
7月29日(火)	運営諮問会議	総長選考暫定措置等の了承 総長選考に関する意見の依頼 総長候補者の推薦依頼
7月29日(火)	選考会議	総長の選考に関する暫定基準等の承認 総長選考日程等の確認
7月29日(火) 8月1日(金)~ 8月20日(水)	臨時評議会	選考管理委員会の設置 総長候補者の推薦受付 (受付期間:20日間程度)
8月26日(火) 8月28日(木)~ 9月8日(月)	臨時評議会	第1次総長候補者の確定 総長候補者の履歴公表 (2週間程度)
9月9日(火) 9月16日(火)	評議会	第1回意向投票(助手以上)実施 第2次総長候補者の確定 選考準備委員会の設置
9月16日(火)~ 信任投票実施日まで 10月24日(金) 第2回意向投票実 施日以降	運営諮問会議	所信表明等の公表 第2回意向投票(教授)実施 総長候補者絞込みに対する意見の提出
11月18日(火)	評議会	第3次総長候補者の確定
11月25日(火)	臨時評議会	総長候補者を審議
11月25日(火)	選考会議	総長候補者を決定
12月初旬		文部科学省に総長候補者の上申

INFORMATION

テクノ・フェア名大‘2003’の開催のお知らせ

1. 名称 テクノ・フェア名大‘2003’「工学を拓く 新たな産学官連携の芽を創出」
2. 主催者 工学部・大学院工学研究科及び関連研究科・センター
3. 開催趣旨 大学の使命として、地域社会や産業界の要請等に積極的に対応し、それらの機関との連携・交流を通じて、大学の持つ多くの知的資源等を活用し社会貢献の機能を果たしていくことが期待されています。そこで、工学部・大学院工学研究科及び関連研究科・センターが、地域産業界との密接な交流を図り、大学の研究成果の活用を通じて、新規産業の創出や既存産業の技術の高度化を推進する機会を設け、より一層の「産学官連携」を推進していくことを目的として、大学にあるシーズ(種)の展示や研究室の見学及び講演会を開催いたします。
4. 日程 平成15年11月7日(金)
5. 会場 豊田講堂
シンポジオンホール
6. 後援 中部経済産業局、愛知県、名古屋市、中部経済連合会、名古屋商工会議所、(財)名古屋産業科学研究所中部 TLO、(財)中部科学技術センター、(財)科学技術交流財団、中部エレクトロニクス振興会、東海ものづくり創生協議会、東海ビジネスドットコム、中日新聞社、日刊工業新聞社、日本工業新聞社
7. 参加予定人員 約800名
8. 参加費 無料
9. 開催概要
- 10:00~17:00 研究活動展示会(入場無料)
- 14:00~15:30 展示研究概要説明(1件15分程度)
- 10:15~10:30 講演 平野 眞一 工学研究科長
「名古屋大学工学研究科の産学官連携の取り組み」
- 10:30~11:15 講演 末永 康仁 情報科学研究科教授
武田 一哉 情報科学研究科教授
「社会情報基盤のための音声・映像の知的統合
- 音声および映像の知的処理の基礎と応用 -」
- 11:15~12:00 講演 大日方五郎 先端技術共同研究センター教授
長谷 和徳 工学研究科助教授
「人を知る・つくる・支援する - 身体特性のモデリング技術に基づいた人間福祉医工学 -」



INFORMATION

平成15年度名古屋大学職員創作美術展作品募集について

毎年恒例の職員創作美術展も今年で12回目を迎えます。本年度は10月21日(火)から10月24日(金)までの4日間、シンポジオンホールにおいて開催されることになりました。

只今、職員の皆様の力作を募集しています。作品の種類も幅広く募集していますので、どうぞ奮って出品されるようお願いします。

なお、出品される方は、所属の人事担当掛を通して人事課厚生掛にお申し込みください。

出品の申込み期限(人事課厚生掛申込み期限: 9月19日(金))については、所属の人事担当掛にお問い合わせ願います。

実施要項

1 趣 旨

職員自ら創作活動を楽しみ、美術作品等の鑑賞を奨励するとともに、潤いのある情操豊かな生活、余暇の一層充実した活用を促し、生活に根ざした文化の普及・高揚に資することを目的とする。

2 応募資格等

本学職員とし、出品は1種別につき3点までとする。

3 応募作品の範囲

絵画、絵手紙、書道、写真、彫刻、陶芸、手工芸、生け花

4 展示期間等

期 間 平成15年10月21日(火)~10月24日(金)

時 間 10時~16時(ただし、10月24日(金)は15時までとする。)

5 展示場所 シンポジオンホール

6 作品の搬入等

(1) 作品は、10月20日(月)15時~17時の間に、出品者が展示場所に搬入すること。

なお、作品は、額等に入れ、展示できる状態で搬入すること。

(2) 作品は、美術展終了後の10月24日(金)15時~16時の間に、出品者ごとに返却する。

7 企画及び運営方法

創作美術展の企画・運営は、出品者の協力を得て人事課で行うものとする。

8 その他

応募作品は無審査とし、出品者には参加賞を進呈する。

なお、昨年度まで実施していた名大トピックスへの作品掲載は行わない。

問い合わせ先
 総務部人事課厚生掛
 (福祉厚生センター)
 内線 5980

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（15年7月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	本学「シルクロード調査会」を発足 研究成果がアフガニスタン・パルミヤン遺跡群修復の力に	7.1(火)	読売
2	JST と JSPS が、研究者の立場から企画・立案について助言する新組織をそれぞれ設置 所長にはいずれも、ノーベル化学賞受賞者の野依良治教授が就任	7.1(火)	日刊工業 中日(朝刊)
3	研究室発：環境考古学 遺跡出土のクリを分析 新美倫子・博物館・情報科学研究科助教授	7.1(火)	中日(朝刊)
4	農学部公開講座 服部一三・生命農学研究科教授ら4人の講師による講義「できるか画期的新品種」や実習「食べて実感！調べて納得！-作物の科学」などを二日間実施	7.1(火) 7.12(土)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
5	生物機能開発利用研究センター公開実験講座「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」を8月1日～3日に開催	7.1(火)	中日(朝刊)
6	名古屋地理学会研究報告会 岐阜聖徳学園大助教授らが講演 本学文学部127号室で	7.1(火)	中日(朝刊)
7	訃報 竹田泰雄名誉教授 29日大腸がんのため死去	7.1(火)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
8	法科大学院の設置認可申請 申請校は国公立合わせて72校 東海3県では本学など6校	7.1(火)	読売 他4社
9	地震を知る5:「電子ナマズ」に期待 コンピューターで地震の数値予報を平原和郎・環境学研究科教授	7.1(火)	中日(夕刊)
10	来年度の入試要項を発表 センター試験科目は文系で六教科七科目、理系で五教科七科目に増える	7.2(水)	中日(朝刊) 読売
11	医学部附属病院が診療・研究分離案 患者本位ようやく	7.2(水)	日経(朝刊)
12	報道の未来を考えるシンポジウム 大学院がメディアプロフェッショナル論講座を開設した記念に開く	7.2(水)	中日(朝刊)
13	法科大学院への期待と課題について話し合うシンポジウム 基調講演や、和田肇・法学研究科教授ら4氏によるパネルディスカッションが行われる	7.4(金)	読売
14	難処理人工物研究センターが5年間の中間評価として「02年度外部評価報告書」を作成 中間評価委員会による総合評価「良い」が大半	7.4(金)	日刊工業

	記 事	月 日	新聞等名
15	ITS 世界会議に向け実証モデルの構築を目指す産官学による調査委員会（座長・森川高行・環境学研究科教授）を設立	7.4(金)	中日(朝刊)
16	SARS に関する公開学習・討論会 CAN 主催 八谷寛・医学系研究科助手らが国際化時代の感染症という側面から解説	7.4(金) 7.7(月)	中日(朝刊)
17	大幸砂田橋クリニック（医学部附属病院在宅管理医療部の初代教授・前田憲志院長）は高度な医療を継続しながらの家庭での医療・みとりは可能という	7.4(金)	中日(朝刊)
18	高校生選抜「特区」検討会議 座長・村上隆・教育発達科学研究科教授の初会合 「通学が困難」「予算が心配」など不安の声が相次いだ	7.4(金)	中日(朝刊) 他3社
19	インド美術仏教美術研究会 文学研究科で開催	7.4(金)	中日(夕刊)
20	東海再見：坂田（元理学部教授）研究室で学問に向かう視点学んだ益川敏英・京産大教授	7.5(土)	朝日(朝刊)
21	情報文化学部と環境学研究科主催の公開講座「限りある地球との共存 -持続可能な社会をどう築くか?」 情報科学研究科棟で開催	7.5(土) 7.8(火)	朝日(朝刊) 中日(朝刊)
22	東大や本学など12大学が関西の産官と連携 再生医療など先端バイオ技術の事業化計画競う	7.5(土)	日経(夕刊)
23	「百マス計算」超える人気「志水式計算練習法」 大沢健夫・多元数理科学研究科教授の話「学力低下に一石」	7.7(月)	中日(朝刊)
24	「数学アゴラ」 テーマは「現代数学への招き」 多元数理科学研究科主催 理学1号館で開催	7.7(月)	中日(朝刊)
25	理系白書：専門家の提言（要旨）野依良治教授「大学院の自校比率抑えよ」	7.7(月)	毎日(夕刊)
26	名大サロンの主役：博物館長・足立守教授 「名古屋大学博物館とミュージセラピー」と題し講演 標本、演奏で心癒す	7.8(火)	中日(朝刊)
27	この人に聞く：テーマ21世紀の大学入試 経済学部卒業の丹羽健夫・河合文化教育研究所長 “脱マニユアル”に傾く 悪問は減ってきた	7.8(火)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
28	産学官による「燃料電池応用研究会」を名古屋市が発足 本学などが中心メンバーとなる予定	7.8(火)	日経(朝刊)
29	語らい座第18回例会 阪神大震災教訓 小田実氏が講演 福和伸夫・工学研究科教授と記者が討論	7.8(火) 7.22(火)	毎日(朝刊)
30	名古屋大 COE 第5回オープン・レクチャー 周藤芳幸・文学研究科助教授が「ファラオのテキスト」と題し話す	7.8(火)	中日(朝刊)
31	放射性炭素年代測定 AMS法 微量の炭化物でも可能 年代明かな土器と照合を 中村俊夫・年代測定総合研究センター教授	7.8(火)	中日(夕刊)
32	地震を知る6:地盤の違いにご注意 谷や小川のとなど軟らかい所は大きな揺れに 飛田潤・地震火山・防災研究センター助教授	7.8(火)	中日(夕刊)
33	地場証券に活気 急騰に警戒感も 柳原光芳・経済学研究科講師 「人々の『期待』が実体経済をけん引していると考えられるので実体面での動きに注視する必要がある」	7.9(水)	中日(朝刊)
34	走り出した法人化 国立大改革の周辺で 中:学部の自治どうなる “強い学長”に危機感 本学の次期総長選挙	7.11(金)	中日(朝刊)
35	マタニティセミナー 水谷栄彦・医学系研究科教授らの講演や映画上映、抽選会など	7.11(金)	中日(朝刊)
36	走り出した法人化 国立大改革の周辺で 下:基礎研究の未来どうなる 「成果主義」にのまれる? 本学理学部は今春、「六年制カリキュラム」の検討を始めた 池内了・理学研究科教授は「幅広い理科教育を模索したい」と話す	7.11(金)	中日(朝刊)
37	瀬戸市の再開発中止 県事業評価監視委員会(委員長・田邊忠顕・工学研究科教授)が了承 地権者との調整難航	7.12(木)	朝日(朝刊)
38	がん征圧シンポジウム「婦人科がん」 基調講演「予防・診断・治療」 医学部卒・葛谷和夫・愛知県がんセンター病院副院長	7.12(木)	読売
39	叙位叙勲正四位 成岡昌夫名誉教授	7.12(木)	中日(朝刊)
40	合併先進県きしむ岐阜 進藤兵・法学研究助教授の話 時間をかけて協議し、教育や福祉に力をいれたまちづくりをすることが大切	7.13(金)	中日(朝刊)
41	愛知朝鮮中高級学校生 本学に受験資格の認定を求める申請書を提出	7.15(日)	毎日(朝刊) 他2社
42	今年前半交通死 若者だけが急増 取材班・本学3年長谷川佳美ら3人	7.15(日)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
43	「イラク戦後復興政策コンペ」 本学大学院生らでつくる国際問題研究サークル「シナイで会」が主催 イラク復興支援策のアイデアを学生たちが競い合う	7.15(日) 7.16(月) 7.19(土)	中日(朝刊) 他2社
44	中東情勢めぐり講演 岐阜市でセミナー 中西久枝・国際開発研究科教授が「中東に民主化は必要か」と題し講演	7.15(日)	岐阜新聞(朝刊)
45	地震を知る7:防災対策は歴史に学ぶ 昔のデータ集め説明用モデルに 安藤雅孝・環境学研究科教授	7.15(日)	中日(夕刊)
46	With きゃんぱす:本学留学生支援サークル「SOLV」,「友人」として交流図る	7.15(日)	朝日(夕刊)
47	文部科学省 各大学の知的財産本部を支援する「大学知的財産本部整備事業」の対象に本学など34大学を選定 本学は8月にも学内に「知的財産部」を設置する	7.16(月) 7.17(火)	中日(朝刊) 他6社
48	千種のサッポロビール跡地 国の事業に名乗りへ 予算化されれば、本学、名工大などが連携して研究にあたる	7.16(月) 7.17(火)	中日(朝刊) 読売
49	大学激動:学長主導には批判も 本学3期目の総長立候補は、「教授会自治」を突き崩す可能性をはらむ	7.16(月)	朝日(朝刊)
50	三進製作所相談役で本学大学院生の福田正さん 社内で研究発表	7.16(月)	日刊工業
51	どうする敬老パス対論 変更派 「『ただ』の福祉は駄目」竹内信仁・経済学研究科教授/維持派「負担金130億円 点検を」弁護士	7.16(月)	中日(朝刊)
52	老年学:長寿の極意は食事制限? 井口昭久・医学系研究科老年科教授	7.17(火)	朝日(朝刊)
53	21世紀COEプログラム採択 本学で6件 56大学133件選定	7.18(水)	読売 他5社
54	改正保険業法について家森信善・経済学研究科教授が寄稿 生保は十分な説明を 予定利率商品の規制必要	7.18(水)	中日(朝刊)
55	公開講座「“越境”を科学する～まざりあい、せめぎあう世界」 講師は国際言語文化研究科の教授、助教授など 会場はシンポジウム	7.18(水)	毎日(朝刊)
56	循環型社会会議「市民が創る循環型社会フォーラム・ステークホルダー会議」が本学で開かれる	7.18(水)	中日(朝刊)
57	大学病院「包括払い」始動 入院期間に差、総額逆転も 調整係数が最も高い慶応大病院と、最も低い本学附属病院では約2割の開きがある	7.21(月)	日経(朝刊)
58	エネルギー問題、戦略と教育必要 名古屋でシンポジウム 榎田洋一・環境量子リサイクル研究センター教授ら討論会	7.21(月)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
59	或るバイト：マリン用品で夏気分 本学2年長谷川佳美さん	7 2ㄨ(火)	中日(朝刊)
60	野依良治教授が、理化学研究所の 理事長に 本学を9月末に退官	7 2ㄨ(火)	中日(夕刊) 他5社
61	県内の治安向上を考える有識者懇 談会を設置「安全・安心まちづ くり有識者懇談会」のメンバーは 蔭山英順・教育発達科学研究科教 授ら「教育懇談会」のメンバー は松尾総経長など	7 2ㄨ(水)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
62	研究一流でも文系小粒 本学授業 で自分たちの大学の将来像議論	7 2ㄨ(水)	朝日(朝刊)
63	学会会議は新会長に黒田清氏、副 会長には戒能通厚・本学名誉教授 を選出	7 2ㄨ(水)	日刊工業 他3社
64	レーザー：本学は03年度の21世紀 COE プログラムに6件が採択され た「ここ2年間で名大の実力が 発揮できたと思う」松尾総経長	7 2ㄨ(木)	日刊工業
65	名張毒ぶどう酒事件 弁護団が新 証拠 石川孝司・工学研究科教授 による鑑定書	7 2ㄨ(木)	中日(朝刊)
66	顔：理化学研究所の理事長になる 野依良治教授「専門を超えて成果 を社会に」	7 25(金)	読売
67	続日本を救え！：日本の経済「生 活水準を下げる覚悟も」本学で 博士号を取得した・水谷研治・中 京大学大学院教授	7 25(金)	日刊工業
68	「東南海、南海地震対策特別措置 法」が試行された 地震火山・防 災研究センター長・藤井直之教授 は「長期的予測を生かした防災対 策を進めるべきだ」と話す	7 25(金)	日経(朝刊)
69	大規模地震、大学も備え 携帯な どで安否確認 本学は災害対策室 を設置 地震学教員らが防災対策 を提言 定期セミナーも行う	7 25(金)	中日(夕刊)
70	国を超え尽くしてくれた 難病の トルコ人、医学部附属病院で手術 二村雄次院長ら治療	7 2ㄨ(土)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
71	浪川幸彦・多元数理科学研究科長 の教養、数が苦 「等しい」こと の意味 「無限」避けず世界広げる	7 2ㄨ(月)	中日(朝刊)
72	町おこしと触れ合いの場 森の学 校へようこそ 池内了・理学研究 科教授	7 2ㄨ(月)	中日(朝刊)
73	広がる2学期制教師にゆとり 授 業時間増、学力アップ期待 東海 地方では本学教育学部附属中が実 施し、知立市などが一部で試行	7 2ㄨ(月)	中日(朝刊)
74	名大サロンの主役：竹中千里・生 命農学研究科教授「植物を用いた 環境修復」をテーマに講演 植物 の力で土壌浄化	7 2ㄨ(火)	中日(朝刊)
75	公開講座 総合テーマ『『越境』 を科学する』初回は佐分晴夫・ 法学研究科教授による講義 会場 はシンポジオン	7 2ㄨ(火)	中日(朝刊)
76	法科大学院入試 有力大の日程重 複 本学は2月14、15日	7 3ㄨ(水)	日経(朝刊) 他2社
77	教育の大地④：法学部 予備校化 に強い懸念 鈴木将文・法学研究 科教授「米国と違い、日本では実 務と教育に通じたスタッフは数少 ない。問題は少なくない」と指摘	7 3ㄨ(水)	読売
78	核廃絶の願いエッセー集に オユ ンナさんの歌に中高生共感	7 3ㄨ(水)	中日(朝刊)
79	大学 LAN 使う音楽交換に NO 本学、注意受け秋にも対策室	7 3ㄨ(水)	日経(夕刊)
80	教育の大地⑤：実務家教員 豊富 な経験に期待 和田肇・法学研究 科教授は実務家教員の限界を指摘	7 31(木)	読売
81	愛・地球博 堀内守名誉教授 今 回のテーマは「自然の叡智」暮ら し方、参考の契機に	7 31(木)	朝日(朝刊)
82	蒲郡の砂浜にスナメリの子 生命 農学研究科で調査、標準化される	5 .1ㄨ(火)	中日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

郁達夫は、1896年中国浙江省富陽県の生まれで、魯迅・郭沫若らにつぐ中国近代文学の代表的な作家です。1913年に来日、1915年名古屋大学の前身校である第八高等学校第三部（医科）に入学しました。翌年第一部（文科）に転部し、1919年に八高を卒業しています。

1921年に刊行された処女小説『沈淪』は、郁達夫八高時代の自伝的小説です。当時の中国人留学生の孤独や抑圧された性を素直に表現しており、中国の近代文学で性的問題を真正面に取り上げた最初の商品として評価されています。また、熱田神宮・鶴舞公園など名古屋の名所が随所に描かれており、当時の名古屋の様子もうかがい知ることができます。

1922年に東京帝国大学経済学部を卒業後に日本を離れ、中国へ帰国後は北京大学・広州大学等で教えるとともに創作活動を行いました。1936年11月に再来日し、志賀直哉・井伏鱒二・大宅壮一・林芙美子・横光利一など当時の日本文壇の著名人とも交流しています。日中戦争が始まった当初は、郭沫若らとともに抗日運動に参加しましたが、1938年にはシンガポールへ移って新聞編集や日本軍憲兵の通訳をしました。1945年の敗戦直後、日本軍憲兵に殺害されてしまいました。戦前日本の誤った時代の犠牲者の一人といえます。

郁達夫文学碑は第八高等学校の同窓会である「八高会」により、八高創立90周年を記念して建てられたもので、題字は横山秀吉氏（八高第16回卒業）で、彫塑は石田武至氏、碑文は大池青岑氏、石は中国浙江省廈門産の御影石です。1998年6月30日に除幕式が行われました。



郁達夫



郁達夫文学碑



八高創立90周年記念「郁達夫文学碑」除幕式



東山キャンパス

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。